

第4章 1次写像と2次形式

4.1 1次写像

座標平面上の各点 $P(x, y)$ にある点 $P'(x', y')$ を対応させているとしよう。この対応を平面から平面への**写像** mapping という。これを記号 f を用いて、

$$f : (x, y) \mapsto (x', y') \quad \text{または} \quad P' = f(P)$$

のように表わす。点 P' を変換 f による点 P の**像** image という。点 P, P' の位置ベクトルをそれぞれ

$$\vec{p} = \overrightarrow{OP} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}, \quad \vec{p}' = \overrightarrow{OP'} = \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix}$$

で表わすと、この写像はベクトル \vec{p} をベクトル \vec{p}' に対応させる写像とみることもできる。このとき、同じ f を用いて $\vec{p}' = f(\vec{p})$ と表わす。

写像 f によりベクトル \vec{p} が \vec{p}' に移され、さらに写像 g により \vec{p}' が \vec{p}'' に移される時、

$$\vec{p}'' = g(\vec{p}') = g(f(\vec{p}))$$

となる。このとき \vec{p} を \vec{p}'' に対応させる写像を f と g の**合成写像** composite といい、 $g \circ f$ で表わす。すなわち

$$(g \circ f)(\vec{p}) = g(f(\vec{p}))$$

である。

点 P をそれ自身 P に対応させる写像は**恒等写像** identity mapping といい、 i で表わす。

変換 f, g について、合成変換 $g \circ f$ と $f \circ g$ が共に恒等写像 i になるとき、 g を f の**逆写像** inverse mapping といい、 f^{-1} で表わす。すなわち、 $f(\vec{p}) = \vec{p}'$ のとき、 $f^{-1}(\vec{p}') = \vec{p}$ である。

平面上のベクトルを平面上のベクトルへ移す写像

$$f : \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} \quad \text{または} \quad \vec{p}' = f(\vec{p})$$

において、 x', y' が x, y の一次式

$$\begin{cases} x' = ax + by \\ y' = cx + dy \end{cases} \quad (a, b, c, d \text{ は定数})$$

で表わされるとき、写像 f を**線形写像**または**1次写像** linear mapping という。この式は行列を用いて

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ax + by \\ cx + dy \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$$

と書けるので、一次写像は

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \quad \text{ただし、} \quad A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$$

で表わされる。行列 A を一次写像 f を表わす行列という。また f を行列 A の表わす1次写像という。

f が1次写像ならば、任意のベクトル \vec{p}, \vec{q} と実数 k について

$$f(\vec{p} + \vec{q}) = f(\vec{p}) + f(\vec{q}), \quad f(k\vec{p}) = kf(\vec{p})$$

逆に、この2式を同時にみたす写像 f は1次写像になる。

証明 1次写像 f を表わす行列を A とする。任意のベクトル \vec{p}, \vec{q} と実数 k について、

$$f(\vec{p} + \vec{q}) = A(\vec{p} + \vec{q}) = A\vec{p} + A\vec{q} = f(\vec{p}) + f(\vec{q})$$

$$f(k\vec{p}) = A(k\vec{p}) = k(A\vec{p}) = kf(\vec{p})$$

逆に、この2式を同時にみたす変換 f について、 $\vec{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \vec{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ の像を

$$f(\vec{e}_1) = \begin{pmatrix} a \\ c \end{pmatrix}, f(\vec{e}_2) = \begin{pmatrix} b \\ d \end{pmatrix} \text{ とすると、} \quad \vec{p} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = x\vec{e}_1 + y\vec{e}_2 \text{ の像 } f(\vec{p}) = \vec{p}' = \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} \text{ は}$$

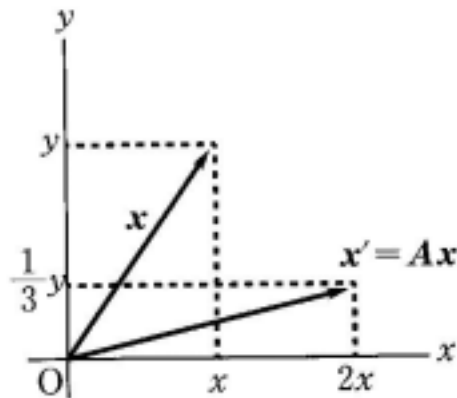
$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = f(x\vec{e}_1 + y\vec{e}_2) = f(x\vec{e}_1) + f(y\vec{e}_2) = xf(\vec{e}_1) + yf(\vec{e}_2) = x \begin{pmatrix} a \\ c \end{pmatrix} + y \begin{pmatrix} b \\ d \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ax+by \\ cx+dy \end{pmatrix}$$

であるから、 f は一次写像である。(終)

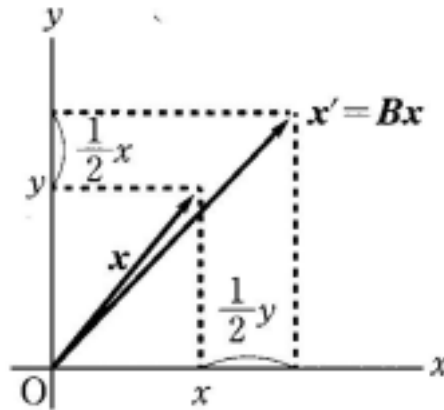
平面的ベクトル x に x' を対応させる1次写像 $x' = Ax$ を図で示そう。

まず、 A が対角行列、例えば $A = \begin{pmatrix} 2 & 0 \\ 0 & \frac{1}{3} \end{pmatrix}$ のとき、 $\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 & 0 \\ 0 & \frac{1}{3} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$ から $\begin{cases} x' = 2x \\ y' = \frac{1}{3}y \end{cases}$

であるので、行列 A は x 軸方向に2倍に拡大し、 y 軸方向に $\frac{1}{3}$ 倍に縮小する写像を表わしている。



また, $B = \begin{pmatrix} 1 & \frac{1}{2} \\ \frac{1}{2} & 1 \end{pmatrix}$ のとき, $\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = B \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x + \frac{1}{2}y \\ \frac{1}{2}x + y \end{pmatrix}$ であるから, 対応の様子は次の図
 のようである.



恒等写像 i を表わす行列は単位行列 $I = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$ である.

1次写像 f, g について, 合成写像 $g \circ f$ も1次写像であり, f, g を表わす行列を A, B とすると, $g \circ f$ を表わす行列は BA である.

1次写像 f で逆写像をもつのは, f を表わす行列 A が逆行列をもつ (A が正則) とときであり, そのとき逆写像 f^{-1} を表わす行列は A の逆行列 A^{-1} である.

証明 まず, 任意の $\mathbf{p} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \in R^2$ について, $i(\mathbf{p}) = \mathbf{p} = I\mathbf{p}$ である. 次に, f, g が1次写像のとき, 任意のベクトル \mathbf{p}, \mathbf{q} と実数 k について

$$\begin{aligned} (g \circ f)(\mathbf{p} + \mathbf{q}) &= g(f(\mathbf{p} + \mathbf{q})) = g(f(\mathbf{p}) + f(\mathbf{q})) \\ &= g(f(\mathbf{p})) + g(f(\mathbf{q})) = (g \circ f)(\mathbf{p}) + (g \circ f)(\mathbf{q}) \end{aligned}$$

$$(g \circ f)(k\mathbf{p}) = g(f(k\mathbf{p})) = g(kf(\mathbf{p})) = kg(f(\mathbf{p})) = k(g \circ f)(\mathbf{p})$$

であるから, 合成写像 $g \circ f$ が1次写像である. またその表わす行列は,

$$(g \circ f)(\mathbf{p}) = g(f(\mathbf{p})) = B(f(\mathbf{p})) = B(A\mathbf{p}) = (BA)\mathbf{p}$$

から, BA であることがわかる.

1次写像 f が逆写像 g をもつとき, $g \circ f = i$ と $f \circ g = i$ から g も1次写像であることを示す.

任意のベクトル \mathbf{p}', \mathbf{q}' とスカラー k について, $g(\mathbf{p}') = \mathbf{p}, g(\mathbf{q}') = \mathbf{q}$ とおく. このとき, $f(\mathbf{p}) = \mathbf{p}', f(\mathbf{q}) = \mathbf{q}'$ であり, f は1次変換だから

$$f(\mathbf{p} + \mathbf{q}) = f(\mathbf{p}) + f(\mathbf{q}) = \mathbf{p}' + \mathbf{q}', f(k\mathbf{p}) = kf(\mathbf{p}) = k\mathbf{p}'$$

従って, $g(\mathbf{p}' + \mathbf{q}') = \mathbf{p} + \mathbf{q} = g(\mathbf{p}') + g(\mathbf{q}'), g(k\mathbf{p}') = k\mathbf{p} = kg(\mathbf{p}')$ が成り立ち, g は1次写

像である。そこで、 f と g の表わす行列をそれぞれ A, B とすると、 $AB = I = BA$ であることから、 $B = A^{-1}$ であり、 g を表わす行列は A の逆行列 A^{-1} であるといえる。(終)

点 $P(x, y)$ を原点のまわりに θ だけ回転した点 $P'(x', y')$ に移す写像 f_θ は、次の線形写像で表わされる。

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$$

その逆写像 f^{-1} は、原点のまわりの $-\theta$ だけの回転である。即ち、 $f_\theta^{-1} = f_{-\theta}$ である。

また、 $f_{\alpha+\beta} = f_\beta \circ f_\alpha = f_\alpha \circ f_\beta$ がなりたつ。

証明 原点のまわりの角 θ だけ回転移動 f_θ が 1 次写像であることは、図を使って

$$f_\theta(\vec{p} + \vec{q}) = f_\theta(\vec{p}) + f_\theta(\vec{q}), \quad f_\theta(k\vec{p}) = kf_\theta(\vec{p})$$

を示すことで分かる。同じく $\vec{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \vec{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ を回転すると $\begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -\sin \theta \\ \cos \theta \end{pmatrix}$ である。

従って、先の証明から $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$ の像は $\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$ となる。

後半は意味を考えると明らかである。(終)

写像 $f: R^3 \rightarrow R^2$ (あるいは $f: R^2 \rightarrow R^3$) が、任意のベクトル \mathbf{x}, \mathbf{y} と実数 k について

$$f(\mathbf{x} + \mathbf{y}) = f(\mathbf{x}) + f(\mathbf{y}), \quad f(k\mathbf{x}) = kf(\mathbf{x})$$

を満たすとき、 f を 1 次写像という。

$f: R^3 \rightarrow R^2$ が 1 次写像のとき、 f を表す行列は 2×3 型であり、 $f: R^2 \rightarrow R^3$ が 1 次写像のとき、 f を表わす行列は 3×2 型である。

写像 $f: R^3 \rightarrow R^3$ が任意のベクトル \mathbf{x}, \mathbf{y} と実数 k について

$$f(\mathbf{x} + \mathbf{y}) = f(\mathbf{x}) + f(\mathbf{y}), \quad f(k\mathbf{x}) = kf(\mathbf{x})$$

を満たすとき、 f を 1 次写像または空間 R^3 の 1 次変換という。 $f: R^3 \rightarrow R^3$ が 1 次写像のとき、 f を表わす行列は 3×3 型である。

写像 $f: R^2 \rightarrow R^1 = R$ や 写像 $f: R^3 \rightarrow R$ あるいは

写像 $f: R \rightarrow R^2$ や 写像 $f: R \rightarrow R^3$ もありえる。

写像が $f: R^2 \rightarrow R^2$ のときは、同じ平面の写像だから、特に f は平面の **変換 transformation** という。同様に写像 $f: R^3 \rightarrow R^3$ は空間の変換という。これらの変換が 1 次写像であれば、**1 次変換** または **線形変換** という。単位変換、逆変換、合成変換という用語も同様に使おう。

例えば

写像 $f: \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto x$ は空間の点の x 軸への正射影である 1 次写像である。

写像 $f: x \rightarrow \begin{pmatrix} x \\ 2x \end{pmatrix}$ は R から R^2 への1次写像である。

写像 $f: \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$ は空間の点の x y 平面への正射影である1次写像である。

写像 $f: \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x \\ y \\ x+y \end{pmatrix}$ は x y 平面の点を空間の点へ移す1次写像である。

変換 $f: \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x \\ y \\ -z \end{pmatrix}$ は空間の点の x y 平面に関する対称移動である1次変換である。

変換 $f: \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x \\ -y \\ -z \end{pmatrix}$ は空間の点の x 軸の周りの 180° 回転である1次変換である。

変換 $f: \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} -x \\ -y \\ -z \end{pmatrix}$ は空間の点の原点に関する対称移動である1次変換である。

変換 $f: \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x \cos \theta - y \sin \theta \\ x \sin \theta + y \cos \theta \\ z \end{pmatrix}$ は空間の点の z 軸のまわりの θ だけの回転である。

平面上の変換 f は点 P を点 $P' = f(P)$ に移した。平面上のいろいろな図形 G を点集合とみて、 f による G の像 $G' = f(G) = \{f(P) \mid P \in G\}$ を考えることができる。

平面上の点を原点のまわりに $\frac{\pi}{4}$ だけ回転する線形変換で、 x 軸は直線 $y = x$ に、双曲線 $x^2 - y^2 = 1$ は双曲線 $2xy = 1$ に移される。

m, n, p, q は2または3であるとし、 $f: R^n \rightarrow R^m$, $g: R^p \rightarrow R^n$, $h: R^q \rightarrow R^p$ はそれぞれ1次写像であるとする。それらを表わす行列を順に A, B, C とすると、 A は $m \times n$ 型、 B は $n \times p$ 型、 C は $p \times q$ 型である。合成写像 $f \circ g: R^p \rightarrow R^m$ を表わす行列は AB であり、合成写像 $g \circ h: R^q \rightarrow R^n$ を表わす行列は BC である。従って、等しい合成写像

$$(f \circ g) \circ h = f \circ (g \circ h): R^q \rightarrow R^m$$

を表わす行列 $(AB)C$ と $A(BC)$ は等しい。

これは、行列の積の結合法則の自然な証明である。

m, n は2または3とし, $f: R^n \rightarrow R^m$ は1次写像とする.

$$\text{Im}(f) = \{f(\mathbf{x}) \mid \mathbf{x} \in R^n\} \quad (f \text{ の像 image という})$$

$$\text{Ker}(f) = \{\mathbf{x} \mid f(\mathbf{x}) = \mathbf{0}\} \quad (f \text{ の核 kernel という})$$

とおく.

$\text{Im}(f)$ は R^m の部分空間をなし, $\text{Ker}(f)$ は R^n の部分空間をなす.

証明 任意の $\mathbf{a}, \mathbf{b} \in \text{Im}(f)$ とスカラー k をとる. $\mathbf{a} = f(\mathbf{x}), \mathbf{b} = f(\mathbf{y})$ を満たす $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in R^n$ が存在する. $\mathbf{x} + \mathbf{y}, k\mathbf{x} \in R^n$ だから $\mathbf{a} + \mathbf{b} = f(\mathbf{x}) + f(\mathbf{y}) = f(\mathbf{x} + \mathbf{y}) \in \text{Im}(f)$ また $k\mathbf{a} = kf(\mathbf{x}) = f(k\mathbf{x}) \in \text{Im}(f)$ をえる. これで $\text{Im}(f)$ は R^m の部分空間であることが示された.

次に, 任意の $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in \text{Ker}(f)$ とスカラー k をとる. $f(\mathbf{x}) = \mathbf{0}, f(\mathbf{y}) = \mathbf{0}$ だから,

$$f(\mathbf{x} + \mathbf{y}) = f(\mathbf{x}) + f(\mathbf{y}) = \mathbf{0} + \mathbf{0} = \mathbf{0} \quad \text{また} \quad f(k\mathbf{x}) = kf(\mathbf{x}) = k\mathbf{0} = \mathbf{0}$$

である. ゆえに $\mathbf{x} + \mathbf{y}, k\mathbf{x} \in \text{Ker}(f)$ であり, $\text{Ker}(f)$ は R^n の部分空間をなすことが示された.(終)

計算例 1次変換 $f: R^3 \rightarrow R^3$, $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \mathbf{x}' = \begin{pmatrix} x+2y+3z \\ 4x+5y+6z \\ 7x+8y+9z \end{pmatrix}$ について f の像と核を

求めよう. f の表わす行列を $A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{pmatrix}$ とし, その A の第 i 列のベクトルを \mathbf{a}_i とおく

$$(i=1,2,3) \cdot \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = x\mathbf{e}_1 + y\mathbf{e}_2 + z\mathbf{e}_3 \quad \text{の像が} \quad f(\mathbf{x}) = xf(\mathbf{e}_1) + yf(\mathbf{e}_2) + zf(\mathbf{e}_3)$$

$= x\mathbf{a}_1 + y\mathbf{a}_2 + z\mathbf{a}_3$ より $\text{Im}(f) = \{f(\mathbf{x}) \mid \mathbf{x} \in R^3\}$ は $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ で張られる. ここで

$\mathbf{a}_3 = -\mathbf{a}_1 + 2\mathbf{a}_2$ であり, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$ は1次独立だから, f の像 $\text{Im}(f)$ は基底を $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$ とする

2次元の部分空間である.

次に, A に行基本変形を行うと, $A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{pmatrix} \rightarrow \dots \rightarrow B = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 0 & 1 & 2 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ となるので

$$\begin{cases} x+2y+3z=0 \\ y+2z=0 \end{cases} \text{ を } z=t \text{ とおいて解くと } \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} t \\ -2t \\ t \end{pmatrix} = t \begin{pmatrix} 1 \\ -2 \\ 1 \end{pmatrix} \text{ となり, } f \text{ の核 } \text{Ker}(f)$$

は基底を $\begin{pmatrix} 1 \\ -2 \\ 1 \end{pmatrix}$ とする 1次元の部分空間である.

2次の直交行列 A で表わされる線形変換 f を直交変換 orthogonal transformation という.

平面の1次変換 f について, 次の条件は同値である.

f は直交変換である.

f はベクトルの大きさを変えない, 即ち, $|f(\mathbf{p})| = |\mathbf{p}|$ である.

f はベクトルの内積を変えない, 即ち, $f(\mathbf{p}) \cdot f(\mathbf{q}) = \mathbf{p} \cdot \mathbf{q}$ である.

証明 $\Rightarrow \Rightarrow \Rightarrow$ の順に示す. f を表わす行列を $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ とする.

\Rightarrow : A は直交行列だから ${}^tAA = E$ をみたすので

$$f(\mathbf{p}) \cdot f(\mathbf{q}) = A\mathbf{p} \cdot A\mathbf{q} = {}^t(A\mathbf{p})(A\mathbf{q}) = ({}^t\mathbf{p}{}^tA)(A\mathbf{q}) = {}^t\mathbf{p}({}^tAA)\mathbf{q} = {}^t\mathbf{p}E\mathbf{q} = {}^t\mathbf{p}\mathbf{q} = \mathbf{p} \cdot \mathbf{q}$$

即ち, $f(\mathbf{p}) \cdot f(\mathbf{q}) = \mathbf{p} \cdot \mathbf{q}$ である.

\Rightarrow : $|f(\mathbf{p})|^2 = f(\mathbf{p}) \cdot f(\mathbf{p}) = \mathbf{p} \cdot \mathbf{p} = |\mathbf{p}|^2$ より $|f(\mathbf{p})| = |\mathbf{p}|$ である.

\Rightarrow : $\mathbf{p} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$ について $|f(\mathbf{p})| = |\mathbf{p}|$ とする. $f(\mathbf{p}) = A\mathbf{p} = \begin{pmatrix} ax+by \\ cx+dy \end{pmatrix}$ だから

$$(ax+by)^2 + (cx+dy)^2 = x^2 + y^2$$

$$\therefore (a^2+c^2)x^2 + 2(ab+cd)xy + (b^2+d^2)y^2 = x^2 + y^2$$

これが任意の x, y について成り立つから

$$a^2+c^2=1, ab+cd=0, b^2+d^2=1$$

従って, A は直交行列であり, f は直交変換となる.

練習問題 4.1

(1) 次の写像 f は1次変換か.

$$f\left(\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}\right) = \begin{pmatrix} x_2 \\ x_1 \end{pmatrix}$$

$$f\left(\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}\right) = \begin{pmatrix} x_1+x_2 \\ x_2 \end{pmatrix}$$

$$f\left(\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}\right) = x_1 x_2 \qquad f\left(\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}\right) = \begin{pmatrix} x_1 + 2x_2 - 1 \\ 3x_1 - x_2 + 2 \end{pmatrix}$$

(2) 次の線形変換を表わす行列を求めよ.

$$f:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} 3x+2y \\ x-3y \end{pmatrix} \qquad f:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} 2y \\ -x \end{pmatrix}$$

$$f:\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} 3x+4y-z \\ x+y \end{pmatrix} \qquad f:\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x+y \\ y+z \\ z+x \end{pmatrix}$$

(3) 1次写像 $f: R^3 \rightarrow R^2$, $x \mapsto Ax$ によって

$$\begin{pmatrix} 0 \\ -1 \\ -1 \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} -1 \\ -7 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} -2 \\ 4 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} 2 \\ 2 \\ 1 \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} 5 \\ 13 \end{pmatrix}$$

となるとき, 行列 A を求めよ.

f を R^2 からそれ自身への線形写像で,

$$f\left(\begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}\right) = \begin{pmatrix} 3 \\ -4 \end{pmatrix}, \quad f\left(\begin{pmatrix} 1 \\ 3 \end{pmatrix}\right) = \begin{pmatrix} 0 \\ -3 \end{pmatrix}$$

を満たすものとする. $f\left(\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}\right) = A\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}$ と表現したときの行列 A を求めよ.

$$\text{ベクトル } \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 3 \\ 2 \\ 1 \end{pmatrix} \text{ をそれぞれ } \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \text{ に移す線形変換を表わす行列}$$

を求めよ.

(4) R^2 の線形写像 f, g, h をそれぞれ

$$f:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x \\ 0 \end{pmatrix}, \quad g:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} 0 \\ y \end{pmatrix}, \quad h:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} y \\ x \end{pmatrix}$$

とする. 次の合成写像を求めよ.

$$f \circ g, \quad h \circ f, \quad h \circ g, \quad g \circ h, \quad h \circ h$$

(5) 次の1次変換の逆変換があればそれを求めよ.

$$f:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 3 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \qquad g:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 2 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$$